

聖なるものの受肉 —交わりの回復を目指すキリスト教倫理へ—

広瀬由佳

序章 問題の所在

聖書は最も大切な戒めとして神を愛することと隣人を愛することを命じている。しかしキリスト者の「隣人愛」は、なかなか教会の外に届かないという現状がある。ベラーは『心の時代』において「愛は共同体の内部ではかくもはっきり強調されていながら、伝道布教による接触を除けば、外の世界と愛を分かち合う努力はなされていない」¹と指摘している。これはアメリカの福音派に向けた指摘だが、日本の福音派にもあてはまる指摘ではないだろうか。

たとえば、クイア (Queer)²な人々の人権を扱うことについて福音派の中で

¹ ロバート・N・ベラー『心の習慣：アメリカ個人主義のゆくえ』（島蘭進・中島圭志訳、みすず書房、1991年）281頁

² もともとは「奇妙な」を意味する。性規範に囚われない在り方を包括する言葉だが、使用される文脈によって定義は異なってくる。『セクシュアリティ基本用語辞典』（ジョー・イーディー編著、金城克哉訳、明石書店、2006年）によると

は否定的な見方がある³。『聖書信仰の成熟を目指して』の中で斉藤善樹は「LGBTを受け入れるのは、よりリベラルなキリスト教であって保守的なキリスト教ではないと思われています。」⁴と語っている。「LGBTを受け入れる」のは「リベラル」⁵であり、聖書を神の言葉として信じる立場とは相容れないという考えがある。聖書からこのような性の在り方の是非が論じられることはある。しかし、その議論はこれらの人々を愛することには繋がりにくい⁶。隣

「1960年代以降レズビアンやゲイ・コミュニティが形成され始めると、非異性愛を『総括』する言葉として、また異性愛主義的な言葉をひっくり返しアイデンティティについて積極的に語ろうとする（Queer and proud/クィアであり[それに対し]誇りを持つ）目的からこの言葉が次第に取り上げられるようになっていった」（245頁）とあり、工藤万里江は『クィア神学の挑戦—クィア、フェミニズム、キリスト教』（新教出版社、2022年）において「強制的異性愛と家父長制に支えられた社会（キリスト教会も含む）構造の中で『逸脱』とされる側から、そうした既存の権力構造を徹底して批判的かつ反同化主義的に問う姿勢として用いたい」（24頁）と述べている。本稿では性別二元論や異性愛主義といった性規範を越えた在り方を指す言葉として用いる。引用や引用に関する記述については「クィア」ではなく「LGBT」という語を使用することもあるが基本的な意味は同じである。³ クリスチャン新聞 2022年5月22日号「教会とLGBTQ①」5面では「キリスト教会の、特に保守的福音派や伝統派には信仰的な意味での『罪』の問題は譲れないという意識が根強く、そうした時流には強い抵抗があった。」とした上で、「最近、聖書信仰を標榜する福音派の中からも従来の見方を捉え直す動きが出てきている。」と書かれている。

⁴ 斉藤善樹「聖書は多様な性のあり方にどのように向き合うべきか」『聖書信仰の成熟を目指して』（日本福音同盟神学委員会編、いのちのことば社、2017年）96頁

⁵ 福音派の中で侮蔑的な意味合いをこめて使われる呼称であり、他者を非難する際に使用することは控えるべきだと考えるが、このような表現をもって人権問題への取り組みを批判する声がある。

⁶ コディー・サンダースは『クィア・レッスン 私たちがLGBTQから学べること』（原口建訳、エメル出版、2021年）30-31頁において「こういった姿勢（引用者注：クィアな人々のセクシュアリティの是非を問う姿勢）は、質問の『対象』となっている人々が現実息を吐いている人間であるという事実から私たちの意識を遠ざ

人愛を実践しようとしているにもかかわらず、その向き合い方が却って隣人を傷つけ、排除してしまうというジレンマを招いているのである。

倫理的課題と向き合うことが隣人愛に結びつかないというジレンマは、倫理的課題の扱い方に問題があるために起こるのではないだろうか。キリスト教倫理において「罪」⁷とみなされる行為にだけ注目すると隣人の抱える痛み⁸が置き去りにされてしまう。このことが痛みを抱える人々をより一層傷つけ、交わりから去らざるを得ない状況に追い込んでしまう。倫理的課題を扱うためには単にある課題の是非を問うというだけでなく、痛みと向き合うことが必要なのではないだろうか。

キリスト教倫理において「肉」の側面が軽視されると痛みは神との関係に比べて取るに足りない事柄となる。あるいは、神との関係さえ回復されれば痛みは問題ではなくなるかのように思われる。そのようなキリスト教倫理の問いは抽象的な議論になり、この世で痛みを覚えている人々がいるという事柄がなおざりにされる。我々は救われてもお肉において痛みを感じるものである。痛みと向き合うことなく是非だけを問う議論は、肉である我々の現実にそぐわない。

けさせ、そういった疑問の答え探しに役立つ情報を探させることで、その疑心をさらに強固にさせる。」と指摘する。

⁷ ここで「罪」と括弧書きで記しているのは、教会の伝統の中で「罪」とされている行為の中には聖書の中に明確に「罪である」と定義されていない行為や、罪かどうかは神学的理解に左右される行為があるからである。本稿で括弧つきで「罪」あるいは「罪人」と記す場合、聖書で明確に禁じられているか否かに関係なく教会の伝統の中で「罪」とされている行為全般、またそのような行為を行っていると思われる人々を指す。

⁸ 本稿では倫理的課題によって引き起こされる「痛み」に着目してキリスト教倫理を論じていく。本稿で扱う「痛み」とは身体的な痛みに限定せず、倫理的課題によって引き起こされる精神的痛み・社会的痛み・スピリチュアルペインを含む全人的な痛みのことである。

ハワーワスは、イエス・キリストの物語を社会倫理であるとし、信仰共同体の形成をこの物語と結びつけて語っている⁹。イエス・キリストは痛みのある世界に、痛みを感じることで「肉」として来られた。人を排除するのではなく失われた人との交わりを回復した。そこで本稿では受肉したイエス・キリストの歩みに着目したい。1章ではキリスト教倫理を自己物語との関係で捉え、2章でヨハネ福音書からイエス・キリストの地上での肉としての歩みから交わりを回復する倫理を構築する手がかりを得る。これらを踏まえ、3章ではホワイトとエプストンが提唱したナラティヴ・セラピーの手法をキリスト教倫理に適用して信仰者が自身を書き入れるべき物語的文脈を手に入れ、4章で現代の倫理的課題の一例としてクイアを取り上げ、3章で手に入れた物語をクイアな人々との向き合い方に適用する。

1章 キリスト教倫理と自己物語

1節 キリスト教倫理の役割

そもそも、聖書から倫理を問うことは可能なのだろうか。現代の価値観に照らし合わせてみると、隣人愛と対立するような非倫理的に見える記述が聖書の中に見られる。聖書で命じられていることを現代の文脈にそのまま当てはめようとすると「神を愛すること」と「隣人を愛すること」が対立するような事態に陥ってしまうのである。

しかし、聖書の倫理基準を必ずしも閉じられたものと捉える必要はない。ウェブは、現代の文脈に対してただ聖書の基準を当てはめることは、「贖いの精神」を果たすものではないと言い、贖いの運動の解釈学という視点でキリス

⁹ Stanley Hauerwas, *A Community of Character: Toward a Constructive Christian Social Ethic* (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1989), 37.

ト教倫理を考える¹⁰。聖書は閉じられた完全な倫理基準を示すものではなく、より高い究極的倫理基準へと向かっていると考えるのである。聖書から倫理を問う場合、単にある課題について是非を論じるというのではなく、聖書が指し示す方向性を読み取り、その方向性に合わせて現代の問題を考える必要があるということである。

このように聖書は方向性を示すものであると捉える聖書観は「物語」という考え方や馴染みやすい。「物語」とはフィクションという意味ではない。スカは物語を「語り手によって聴衆に伝達される言語的メッセージ」¹¹であるとする。「物語」とは「語り手」が出来事に意味付けし、何らかのメッセージを伝達するために語るものであり、その意味で聖書は「物語」と言える。聖書はある文脈に従って、我々が向かうべき方向性を示す書物だからである。

クライツは、世界に溢れるあらゆる物語の中でも自分自身と世界を認識させ、生に指針を与える「聖なる物語」¹²があるというが、信仰者にとって聖書はそ

¹⁰ William J. Webb, *Slaves, Women & Homosexuals: Exploring the Hermeneutics of Cultural Analysis* (Westmont: InterVarsity Press, 2001), 33–34. 本稿では倫理的課題の例としてクイアな人々の人権を扱っている。このことについてウェブは同性愛は認められないという結論を出している。筆者の立場はウェブとは異なっているが、同性愛が「罪」か否かを論じることは本稿の主題から外れるため、詳述を控える。

¹¹ J・L・スカ『聖書の物語論的読み方 新たな解釈へのアプローチ』（佐久間勤・石原良明訳、日本キリスト教団出版局、2013年）73頁

¹² Stephen Crites, *The Narrative Quality of Experience* (Oxford: Oxford University Press, 1971), 295. 本稿で用いているナラティヴ・セラピーは自己物語を語るものであるため、通常主語は「私」になる。しかし、榎本博明は『〈ほんとうの自分〉の探し方 自己物語の心理学』（講談社、2002年）26頁で「僕たちは、いったいどれほど独自な人生を歩んでいるだろうか。自分自身の人生を生きているつもりでありながら、じつは既存の物語を生きているということがないだろうか。幼い頃から僕たちの心の中に取り入れられ、そのエッセンスが吸収され、僕たちの人生の物語的文脈を方向づけているような種々の物語というのがあるのではないだろうか」と語る。信仰者の自己物語は、クライツの言う「聖なる物語」であり榎本の言う「既存の物語」

のような書物である。Ⅱテモテ3章16-17節で語られるように、信仰者は聖書によって整えられる。キリスト教倫理は、聖書という「聖なる物語」を自分自身の「物語」にするとどのようなことか、現実の世界でどのように演じていくべきかということを論じるものであると言えよう。

方向性を示す書物として聖書を見るならば、キリスト教倫理の捉え方も特定の行為の是非を問うだけのものではなくなる。ハワーワスは「キリスト教倫理は、初めに『あなたはしなければならない』とか『してはならない』という問題に関心を持つのではなく、むしろ世界を正しく想像するのを助けることを最初の課題とすべきである。……キリスト教倫理の仕事は、基本的にわたしたちに『見る』ことをおしえることである」¹³と述べる。キリスト教倫理は我々に「世界」と「アイデンティティ」についての見方を提供し、我々が向かうべき方向性を与えるものだと言えよう。

聖書は神が目指している「世界」を物語る。信仰者はその物語の中で、神との関係における自身の「アイデンティティ」を理解する。キリスト教倫理における「痛み」との向き合い方は、「痛み」あるいは弱さや肉といったものがどのように聖書の中で物語られているかによって決められるのである。

2節 キリスト教倫理と自己物語

「自分が何者であるか自分で語って聞かせるストーリー」¹⁴として理解されるアイデンティティを自己物語と言う。この見方においては人間がどのような

である聖書の解釈に左右されると考えられる。したがって、本稿では「私」という主語を持つ物語ではなく、解釈された聖書の物語を信仰者の自己物語と見なす。

¹³ スタンリー・ハワーワス『平和を可能にする神の国』（東方敬信訳、新教出版社、1992年）65-66頁

¹⁴ R・D・レイン『自己と他者』（志賀春彦・笠原嘉訳、みすず書房、1975年）110頁

アイデンティティを持ち、どのように生きていくかは、その人の持つ自己物語の文脈によって決定されると考えられる。それまで生きてきた人生を物語的文脈として理解し、それがその後の生き方を開いていくのである。

自己物語は書き換えることができる。物語の書き換えに着目した治療法を提唱したのがホワイトとエプストンである¹⁵。この治療法は「ナラティブ・セラピー」と呼ばれる。彼らは「生きられた経験」とクライアントが持っている物語の間に生じている齟齬に着目し、生きづらさは彼らが現在語っている物語から課せられたものだと考え、これを「ドミナント・ストーリー」と呼ぶ。クライアントを苦しめているドミナント・ストーリーはクライアントの「生きられた経験」に一致せず、それによってアイデンティティ拡散に陥り、自分の人生を生きていくことが困難になっている。人が自己物語を語る際、重要と思われるエピソードが選ばれ、順序だてられて語られる。それゆえ、自己物語から取り残されるエピソードがある。「ユニークな結果」と呼ばれるこのようなエピソードを見つけ出し、意味を与えて自己物語に組み込むことで、ドミナント・ストーリーに代わる新しい物語の文脈が生まれる。この新しい物語を「オルタナティブ・ストーリー」と呼ぶ。このように物語を書き換えていく時、クライアントは生きづらさから解放され、新しい一歩を踏み出すことができるようになるのである。

この書き換えをキリスト教倫理のジレンマにあてはめることができる。「罪」とみなされる行為にのみ着目して痛みを置き去りにしてしまうキリスト教倫理もある物語に基づくものである。それは、人間の「肉」としての性質を救いとは相容れないものとして軽視するような物語である。しかし、従来の物語が隣人愛に結びつかないというジレンマを生むものであるなら、この物語を書き換えることでジレンマを解消することができる。

¹⁵ マイケル・ホワイト、デビッド・エプストン『物語としての家族』（小森康永訳、金剛出版、1992年）